

STILLE NACHT! HEIL`GE NACHT(きよしこの夜)

と

このザルツブルクの歌の“新しい“ 物語、

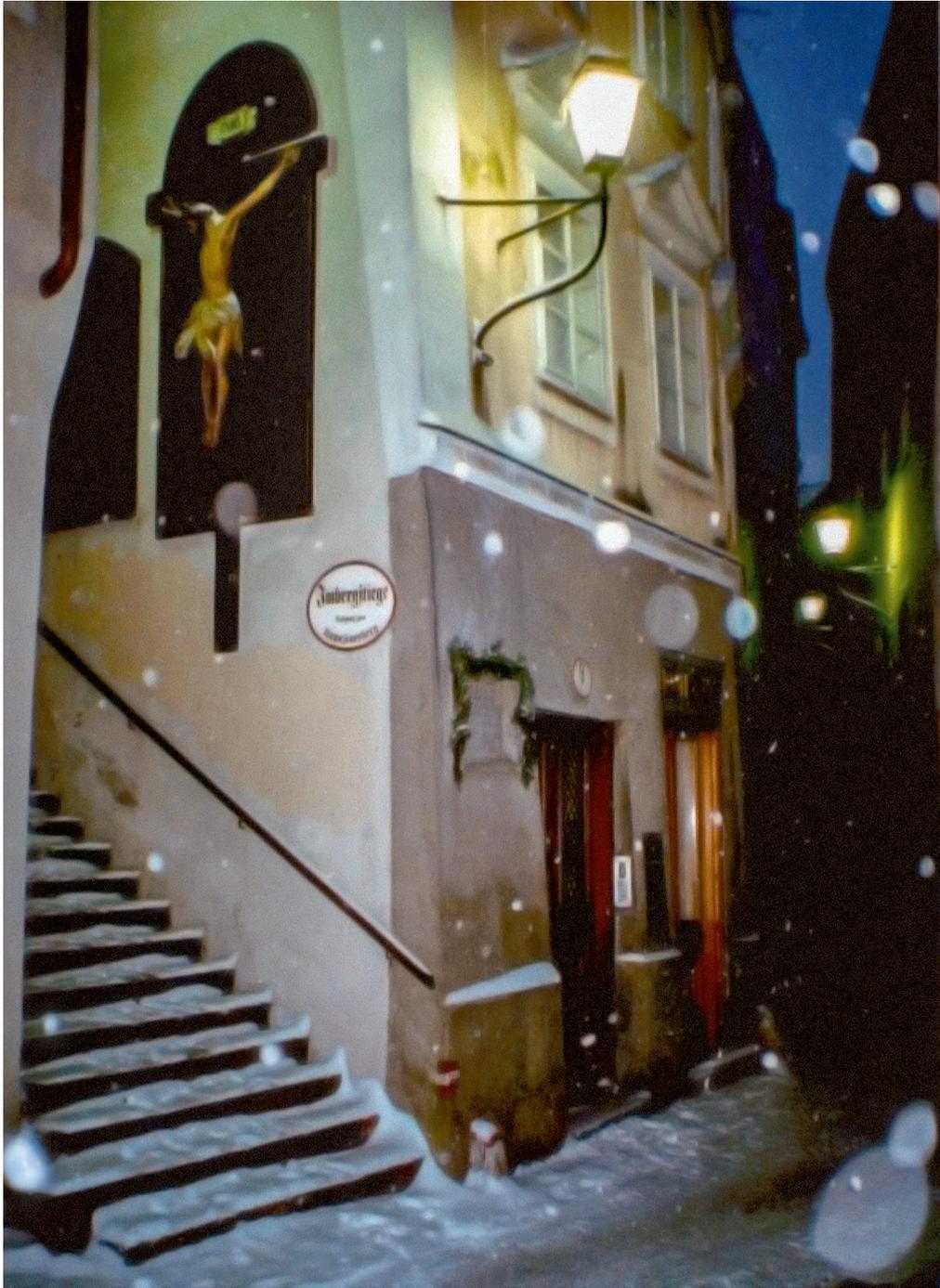
およびヨーゼフ・モーアの人生

ハンノ・シルフ

翻訳:

森田草子

長尾厚徳



きよこの夜博物館、シュタインガッセ9、ザルツブルク



復元されたモーアの生まれた部屋、きよしこの夜博物館、ザルトブルク



台所、きよしこの夜博物館、ザルトブルク

時は1792年にさかのぼる。

当時、ザルトブルガー・シュタインガッセにある20平米もない小さな部屋に、ヨーゼフの母である38歳のアンナ・ショイバーが住んでいた。そこには、まだ暮らしぶりがよかったころから家族と生活をともにしてきた家具に交じって、数少ない家財道具があった。壁の一面にはまだ紡がれていない羊毛の塊が掛かっており、反対側には既に玉になった毛糸や編みあがった手袋やマフラー、靴下が一本の紐に連なっていた。大きなテーブルの上に一本の蝋燭が灯され、乏しい光りの中で72歳になるアンナの母は編物をしていた。部屋には他にさらに二人の義理の姉妹と従姉妹テレージアが住んでいた。テレージアはテーブルにこびりついた口を削り取っている最中だった。彼女が蝋燭にそれを足すと、燃え尽きようとしていた炎は再び大きくなった。

一部屋に五人が暮らしていたのだ。部屋の外にある台所では、一人だけが日に三回立ち入りを許されていたのだが、それは大家が、同じ階に住む他の住人たちが唯一暖をとれる台所に一日中居座ることを阻止するためであった。そのため、アンナは料理の度に大きな石を一緒に持って行って火にくべ、それを脚付きの鍋に入れて部屋に持ち帰り、気休めほどだが寒さをしのいでいた。

糸紡ぎと編物の収入を合わせても、五人の生活には足りなかったため、アンナは他の収入源を探さねばならなかった。こうしてある早朝に、ルンガウのマリアプファル出身、28歳のフランツ・モーアという歩兵がやってきた。彼は、門番としての夜勤を終えると、家族が起きたあとに幾ばくかの金を払ってベッドを使うのだ。彼らのその暖房器具の無い部屋では、家族の一人が歩兵が制服を脱ぐまでベッドを温め、交代するのである。そして、何度目かに起こったに違いない事故――アンナが起き出すのが遅かったのか、歩兵がベッドに入るのが早かったのか――によって、九ヶ月後にはヨーゼフ・モーアが誕生した。それは歩兵が既に任務を放棄し、脱走したあとだった。だが、その前に妊娠を知ったアンナはそのことを彼に告げていた。そうして、彼はヨーゼフ・モーアの名で洗礼を受けたのである。

男児誕生の後、三度の肉体交渉の罪でアンナ・ショイバーは9グルデンの罰金を言い渡される。二人の義理の姉妹も、それぞれ行方の知れない男の子供を身籠り、未婚の母となっていた。9グルデンはアンナの年収に当たる。牛一頭で12グルデン。彼女一人には決して払えないであろう額で、アンナは幼いヨーゼフを抱くと、ザルトブルクの共同墓地の近くにある死刑執行人の家へ行った。リンツァーガッセに住む革細工の女性がこの面会の段取りをしたのだった。



石門脇の門番、ザルトブルク

男児誕生の後、三度の肉体交渉の罪でアンナ・ショイバーは9グルデンの罰金を言い渡される。二人の義理の姉妹も、それぞれ行方の知らない男の子供を身籠り、未婚の母となっていた。9グルデンはアンナの年収に当たる。牛一頭で12グルデン。彼女一人には決して払えないであろう額で、アンナは幼いヨーゼフを抱くと、ザルツブルクの共同墓地の近くにある死刑執行人の家へ行った。リンツァーガッセに住む革細工の女性がこの面会の段取りをしたのだった。

死刑執行人、フランツ・ヨーゼフ・ヴォールムートは、当時ザルツブルクの町人の一番の嫌われ者であった。過去五十を越える処刑と、拷問による百以上の容赦ない尋問を思えばそれも全く不思議ではない。人々は彼を恐れ、彼のことに触れないように、また彼と目を合わせないように常に気をつけていた。



死刑執行人、  
フランツ・ヨーゼフ・ヴ  
ォールムート

しかし、裕福な彼は世間の自分の評価を改善したいがために、アンナに提案した。彼が彼女の罰金を払うかわりに、ヨーゼフの名付け親になりたいと言うのだった。とはいえ、ザルツブルク大聖堂でのヨーゼフの洗礼には彼は自ら立ち会わず、料理女のフランチスカ・ザヒムを代理に立てた。それは、彼が自分の手で洗礼盤から彼の代子を取り上げられない心苦しさを避けるためだったのか。

ヨーゼフにとっては二重の意味で社会から締め出されたようなものである。私生児であるということはすでに十分まずかった。だがそれ以上に、代父が死刑執行人であるという事実は彼の時代には最悪の条件だった。彼を受け入れる学校はなく、職人もまた同じだった。大道芸人や楽師の見込みはあったが、一番手っ取り早いのは、ザルツァハ川の船乗りになることだっただろう。彼は船の見える川岸で遊び、採鉱場から切り出された塩の山を載せた小舟がザルツブルクを下降し、オーベルンドルフに運ばれるのを見ていた。そこには最も大きな船も停泊し、荷を積み替えると、ドナウ川を通り、ウィーン、ブダペストへ輸送していくのであった。子供のヨーゼフは、しょっちゅうそれらを何キロメートルも追跡しては岸に戻り、街へ帰っていった。この彼の行動は、後々影響して来る。

彼の二つ目の遊び場は、シュタインガッセ9番地の裏の、カプツィーナ修道院に続くインベルク通りだった。カプツィーナベルクは当時すでに日曜日、または祝日の散歩道として人々に人気があった。リンツァーガッセから十字路を上り、修道院にたどり着く。そこからは城塞と連なる山々が一望出来るのである。それからインベルク階段を通過して、ザルツァハ川側から街へと戻る。ヨーゼフは階段に座って遊びながら、着飾った人々が通っていくのを眺めたものだった。



カプツィーナベルク、ザルツブルク

ここで、彼はヨハン・ネポムク・ヒールンレー―ベネディクト会の司祭で大聖堂合唱隊の責任者――と出会う。ヒールンレは、ヨーゼフの歌声を聴き、彼の音楽の才能を見出した。彼は早速アンナからヨーゼフの生まれや代子になったいきさつを聞いた。ヒールンレはひどく胸を痛め、ヨーゼフの未来を案じて、特別な教育を受けさせることを請け負った。そうして、ヨーゼフはザルツブルクの寄宿制の学校、聖ペテロ・ベネディクト会神学校に通う。



聖ペーター僧院教会、ザルツブルク



ザルツブルク大司教、  
ヒエロニムス・フォン・コロレド

その後、ギムナジウムに進み、12歳になるとギター、バイオリン、オルガンを上手にこなすようになった。年を経るにつれ彼の美しい歌声がとりわけ賞賛され、聖ペーター合唱隊で歌うことになり、ここではバイオリニストも担当した。

また13歳の時、ヨーゼフは初めて叱られた。時々合唱隊の練習に遅刻したためであると記録されているが、その中には時代史料のような理由づけもある。そこには”彼が兼任していたコレギエン教会の聖楽隊で、ドイツ語の歌を愛好していたからだ。”とある。

ザルツブルクのあまたの教会で、まだラテン語が使われている中——その言葉は住人の95パーセントは全く理解出来ないでいた——コレギエン教会ではドイツ語でミサが行われていたのである。それを実現したのはザルツブルク大司教、ヒエロニムス・コロレドだった。彼はモーツアルトを国から追い出したが、それを除いてはかなり寛容な聖界諸侯であった。コロレドは1787年には司祭たちに対して、ミサへのドイツ語の導入を支持する方針を示していた。

司祭たちは少なくとも、ある日曜日が、またはある金曜日がどういう意味を持っているのかということドイツ語で説明すべきことになっていた。それに対抗して、司祭たちの中にはこの手の刷新に異を唱える、かなり大きな対抗勢力が形成されていた。さらなる革新の奨励の後、聖職者たちがこの大司教をプロテスタントに宥和的であるとし、ヴァチカンに対して訴えた時、この人物は大学教会でドイツ語を導入し、更に音楽の才能を持つ男児にこの大学の門戸を開くこと——たとえ出自的に高等教育から排除されていたとしても——によって応酬した。その措置のお陰で、ヨーゼフは教育を受けられたのである。そこへきて1808年、バイエルン軍がザルツブルクにまたも侵入する。ヨーロッパは未だナポレオン戦争の只中にあった。ヨーゼフは戦争には行かず、クレムスミュンスターのベネディクト会大学に進んだ。そこで彼は哲学と神学、修辞学と音楽を学ぶ。

1811年、彼はザルツブルクに戻り、学費免除で聖職者教育を受け、1815年に司祭の資格を得た。彼はミサのためのドイツ語の歌を作るのに十分に訓練され、意識づけられていた。なぜならこのことは大司教コロレドの意図であったからだ。彼は、司祭たちも同列の者によって作られた音楽ならばより容易く受け入れるであろうと考えていたのである。その後、ヨーゼフはベルヒテスガーデンへ旅行し、そこで友人たちと共に司祭任命を祝った。帰路はラムサウという地を通った。



ベネディクト会大学の教会、ザルツブルク



ラムサウ

この地の司祭、セヴェリン・ヴァルナーの助手が同日、行方をくらませていた。ヴァルナーとヨーゼフはすぐに打ち解け、ヴァルナーはヨーゼフから10月初旬まで急場の助けをする約束をとりつけた。その後、大司教区会議の指示により、ヴァルナーはまだ彼を引き止めるつもりだったにもかかわらず、ヨーゼフはザルツブルクから南方へ110キロメートルに位置するマリアプファルへ向かう。

三日後、ヨーゼフはラートシュタットに着いた。そこで彼は丁度最後のザマーツゲ——一種のキャラヴァン隊——に加わった。更にローマ古道を歩き、標高2000メートルのタウエルン山道に入った。旅の一行が峠に着くと、山頂は雪に覆われていて、山の反対側のルンガウの谷は、これから半年の間、外の世界と遮断されるのであった。すなわち、4月の終わりまでザマーツゲは編成されないのであった。翌日、彼はマウターン村に、そして、そびえる山々の作り出す標高1200メートルの谷の入り口にあるマリアプファルに到着した。ヨーゼフは何が彼を待っているのだろうかという不安とともに、兵役から逃げた彼の見知らぬ父の故郷、マリアプファルに着いたのだった。

マリアプファルは絵に描いたような場所である。彼は感じのよいシュトフ主任司祭に、その広大な教区で会った。シュトフはヨーゼフと並び、他に二人の助祭、レッカーとヴィントがいた。ルンガウは十教区をも包括していたからである。

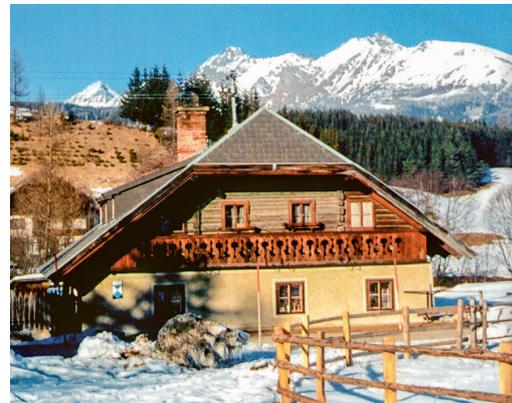
落ち着いて数日経った頃、ヨーゼフはシュトフ司祭について、2キロメートル離れたツァンクヴァルンのハーゼン・グートで行われた洗礼式に行った。そこでシュトフは、ヨーゼフに彼の86歳になる祖父、フランツ・ヨーゼフ・ムーアに会わせた。

彼はハーゼン・グートでサウナを営んでいたが、女性が大多数を占めていたその分野で受け入れられていた数少ない男性の一人だった。

当時、7600人がこの谷に生活していたが、ルンガウ最大の地区、タムスヴェークにはたった一人の医師しかいなかった。このことから住民の健康にとって助産婦や医療知識のある男女がいかに重要であったかが分かる。ヨーゼフの高齢の祖父自身が彼の薬草や果汁、チンキ剤、シュナップス(蒸留酒)の効果の最たる証拠だった。その小瓶に詰められたものは、薬にもなるが、取りすぎるとまた逆の作用も引き起こすものでもあったが。



マリアプファル



祖父の家、マリアプファル



伝統的「サムソン」の行列、マリアブファル

近代的な、ほとんど自然科学的な教育を受けたヨーゼフは、祖父を通じてルンガウの伝統的な慣習に導かれたのだった。これらにはまだキリスト教以前に起源するものも色濃く残っていた。ケルト人やスラヴ人、ローマ人の影響も強かった。これらの生活様式は、キリスト教徒の生活とうまく共存していた。古い慣習の維持には、タウエルン峠によってルンガウが七ヶ月間隔離されるということも一役買っていた。だが、マリアブファルの司祭たちも部分的にはそれに貢献していたのである。

大抵は自身が農家の出、そうでなければシュトフのように地元出身で、この慣習とともに育っていたのだった。彼らが司祭として戻って来るなら、キリスト教の慣習とキリスト教以前の伝統のそれを見分けることは他の地に比べていくぶん容易かった。

古い慣習の維持には、タウエルン峠によってルンガウが七ヶ月間隔離されるということも一役買っていた。だが、マリアブファルの司祭たちも部分的にはそれに貢献していたのである。大抵は自身が農家の出、そうでなければシュトフのように地元出身で、この慣習とともに育っていたのだった。彼らが司祭として戻って来るなら、キリスト教の慣習とキリスト教以前の伝統のそれを見分けることは他の地に比べていくぶん容易かった。彼らは、地域の変わり者が道を誤ったり、あるいは苦情に対応しなければならなかった時に、懲罰や糾弾をもってすることは決してしなかった。否、彼等はそれらの者たちを教会に連れて帰り、この慣習の存続は、この者たちがそれを教会に持ち込み、それが神の名において保たれ、キリスト教的名前を得ることによってのみ保証されうるということを言い聞かせた。ヨーゼフがここで学んだことは、後の彼のクリスマスの歌、第5節に用いられた。

学校では既に子供たちは、ローマ寺院の遺跡や、ケルト人やスラヴ人が用いた儀式用の石をふざけて壊してはいけないと教わっていた。それでもローマ石は建材として持ち運ばれ、シュタインドルフのシュタウディンガー・グートに今日も見られるように厩舎の囲いの石柱として用いられたりしていた。

そこには、内向きに育まれてきたキリスト教の信仰と、自然と結びついた農民の生活の間の均整の取れた調和があった。その自然と結びついた生活は伝承される説話に顕著に現れている。例えば、密猟者の一団たるオオカミの兄弟が、木の切り株に化けて見えないようになることが出来、それで狩人たちの目をはぐらかしたというのがそれだ。あるいは、ヴァイスプリアッハ谷の岩山に隠れ住む犬の頭の霊の話。その霊はそこを夜中を通りがかる人々を驚かせ怖がらせていたが、かつて一匹の犬に助けられたことがあったので、犬を同伴してその道を行く者には悪さをしなかったという。



ヨーゼフ・シュトフ司教

自らと同胞の災いを和らげるために人々が行っていた儀式も多様であった。例えば、ことあるごとに大砲が打たれた。大雨が降るならそれを防ぐために、そして雨の少ない年には雨乞いのために。この調和は一度だけ1600年に破られた。この出来事はクリスマスの歌の発祥にも少なからず影響している。

その時マリアプファルに送られた司祭は、この地の慣習の扱い方を知らず、後にはそれらをすべて禁じてしまった。彼にとってはこのような素朴な祭事などは異教的であった。そして、ルンガウの人々がそれを受け入れないでいると、彼は人々を従順にさせるために増税した。すると予想に反して、翌三年で3500世帯のうち2800世帯がプロテスタントに改宗してしまった。

さらに三年経過の後、大司教区会議はこの司祭が人的、財政的にしでかしたことを知ると、即座に一人の田舎の事情に詳しい司祭をマリアプファルに送った。それにより、翌一年半で50世帯を除いて全ての世帯が再びカトリックに戻った。そうして再び伝統的な世界が形成され、新しい司祭もその慣習的生活を保証したのだった。とはいえ、この間に人々の間にはある新しい慣習が形成されており、それは教会に持ち込まれることとなった。プロテスタントたちはカトリック教会に足を踏み入れられなかったものの、敬虔なキリスト教徒として日曜日のミサを放棄するつもりはなかったため、農家に集い聖書を読んでいたのだ。

イースター、聖霊降臨祭やクリスマスなどの重要な祭事の際には、彼らは家畜小屋や大きな農家を飾って祝った。そこにはオルガンがなかったので、彼らはバイオリン、ギター、コントラバス、フルートそして角笛などの田舎風の楽器を持ち寄っていた。また、ラテン語の歌を覚えられないか、覚えようとしないう人もいたので、その穴を埋めるのにドイツ語の歌が歌われることもあった。再び教会に入るのを許された時、彼らは楽器とともに彼らの歌を持ち込んだのだった。



マリアプファルの合唱隊

200年後の1815年、シュトフ司祭とヨーゼフ、助祭のレッカーとヴィントは、聖具室で、興奮した侍者たちとともにクリスマスイブの深夜のミサの準備を終えた。このミサはヨーゼフにとって忘れられないものとなったであろう。

そこでは、司祭と助祭、侍者たちの入場の時だけオルガンが奏でられた。彼らが席に着くと、ゆっくりとそれは消えていき、代わりに農民たちの楽器があとを引き受けた。”キリエ”、”グロリア・イン・エクセルシス・デオ（荒野の果てに）”はラテン語で歌われた。それから、”戸を叩くのは誰”が続いた。そしてそれはドイツ語で歌われたのだった。ドイツ語とラテン語が交互に歌われたのである。さらに、シュトフ司祭はラテン語でのミサにドイツ語での説教を追加した。彼はその中で人々に、クリスマスが彼にとって何を意味するのか、そして彼らにとって何を意味するか、またすべきかを説いた。



ヨーゼフ・モーアのギター

ヨーゼフはこれに打たれた。この美しく調和のとれたミサに魅了され、刺激された彼は次の年、この美しいクリスマスの曲——Stille Nacht (きよしこの夜)——を書き上げたのである。彼はそれを、いつでもどんな場所でも弾けるようにギター用に仕上げた。その時、彼は積雪で教会に行けない人や、寝たきりの病人、さらにはプロテスタントや離婚者、社会的に阻害された人々など、教会に立ち入ることを許されなかった人々のことを思ったのであった。彼のモットー、”きみが私の最も小さい仲間にしたことは、私にも同じことをしたのだ。”に従って。



グリリンガー聖書

1816年、ヨーゼフと祖父が親密な四ヶ月を過ごした後、祖父は他界し、1月27日にヨーゼフが埋葬した。ヨーゼフはその喪失感を相殺するかのように仕事に没頭した。だがそれも束の間、彼は時代の出来事によって現実に引き戻された。ザルツブルクはナポレオン戦争以来、1808年からずっとバイエルン軍に占領されていた。

だが、1816年4月ミュンヘン条約がついに締結されたのだ。この条約でバイエルンは一ヶ月以内のザルツブルク領からの占領軍引き上げを義務付けられた。彼らは略奪や盗みを働きながらそれを行った。その時、銀の祭壇、とても美しい杯と共に三大聖具をなしていた、かの有名なグリリンガー聖書が姿を消している。マリアプファルは1420年にグリリンガー司祭によって備え付けられたこれらの聖具によって巡礼の地になっていたのだ。

だが、ついに自由になれたという人々の喜びを減らすようなものは何もなかった。それはヨーゼフにとってもそうだったようである。なぜなら、彼はクリスマスの歌の第4節でこう書いているのだ。「静かな夜!きよしこの夜!今日、父なる愛のみ力の全てがほとぼした。恵み深く兄弟として抱きしめられた。イエスは、世界の民を。」この節はほとんどの人には知られていない。

同じくほぼ知られていない、神の名において生きている慣習を擁護した第5節にも、「静かな夜!きよしこの夜!長い間、思いに沈んだ。主は我々を、はるか昔の時代の父たちからの怒りから解放し、全世界に愛護を約束された。



「クリスマスの詩」原稿、1816年

とある。この高揚のただ中にあるその年の晩秋、非常に早い冬の訪れは飢饉を引き起こした。その窮状を和らげるため、ヨーゼフは丈夫でない自身の身体を顧みずに働いた。だが、山脈の中に点々と散らばる農家を廻る、死の床にある人に対する塗油のための長い行進は彼に耐えうるものではなかった。彼は幼年期、シュタインガッセの湿った、寒い部屋ですでにかかったことのあった肺病を患った。すなわち、当時第一の流行病であり、シヨイバー一家もまた苦しんだ結核である。



オーベルンドルフ・バイ・ザルツブルク

1817年、この病にかかったヨーゼフの容態は命に関わるほどに悪化し、タムズヴェークでたった一人の医者も彼をこれ以上治療できなくなった。シュトフ司祭は彼をザルツブルクの療養所に連れて行き、六週間、彼が回復するまで滞在させた。

その間、シュトフ司祭は、ヨーゼフが回復の後、オーベルンドルフで助祭の職に就くように手配した。オーベルンドルフには当時、やはりマリアプファル出身で、シュトフの友人ヨーゼフ・ケスラーがいた。ケスラーは人々にとても慕われていた。二人はすぐに打ち解けた。数週間後、教師たちとオルガン奏者のフランツ・クサーヴァー・グルーバーの助けで、最初の、ドイツ語とラテン語での歌とドイツ語の説教による日曜日のミサが行われた。その時初めて教会で何が目の前で行われているのかを理解した人々は、大いに喜んだ。噂はたちまち広がり、そのミサに参加するために周辺の地域からも人々はこぞって足を運んだのだった。



フランツ・クサーヴァー・グルーバー

しかし、この二種類の言語によるミサが続いたのはわずか三月である。1817年11月、ケスラー司祭は転任し、熟年で気難しいゲオルク・ハインリヒ・ネストラが後任となった。彼は神の前の伝統主義者としての本性を現した。まず彼がしたことは、ヨーゼフとグルーバーに言語を混合したミサを禁じることだった。教会の秩序にドイツ語の入り込む余地はなく、ミサはラテン語によるのみ行われるべきというのが彼の意見だった。

ヨーゼフは、おそらくやや生意気に、しかし真実に沿って、イエスもラテン語ではなくアラム語で説教したし、崇高な意識はラテン語によって到達されうるといふことは考え難いと反論した。ネストラはこの発言を厚かましく思い、教会に対する侮辱であるとした。すぐに彼はヨーゼフを従順にならせるために、彼の素性を引っ張り出した。曰く、”ヨーゼフのような私生児が今こうしてあるのは母なる教会のお陰である。今こそ彼はその感謝を示さねばならないのに、人々を扇動するような愚行を思いつく以外の何もしてはいない。”

こうして1818年のうちに、この二世代の司祭による対立が生じた。若く、啓蒙主義的な教育を受けたヨーゼフは、神とギターをもって、教会とはあまり関わろうとしなかったり、または信仰を失ってしまった人々に接し、彼らは影響されるのだった。一方、ネストラーは神と共に人々が彼を訪れるのを待ち、懺悔によって神の教えを広めた。ネストラーはしかし孤独を感じ始め、それは年々嫉妬へと変わっていった。というのも、夏の結婚式では、ヨーゼフはギターを持ってきて人々とビールを飲み交わし、彼らの歌を歌うので、嬉しい客人として迎えられていたからである。

この人気を阻止するのに、ネストラーはヨーゼフの反抗的な態度、子供染みて享樂的な性質を大司教区会議に告発した。洪水でも、その他の折にも水夫見習の少年と同じようにザルツァハ川でポート遊びをする！公共の場でギターを奏でる！くだらない歌を歌う！道で女性と話し、冗談を交わしている！なかでもとりわけ非難されるべきだとされたのは、タバコ入れとパイプベルトに引っ掛けて少年じみた徘徊をするということだった。これらすべてが聖職者にふさわしくなく、教区は真面目な助祭を必要とするとした。

大司教区議会が上級の司祭にネストラーとヨーゼフについての見解を求めたところ、驚くべき答えが返って来たのである。ザンクト・ゲオルゲンの首席司祭は次のように書いている。”ネストラー司祭からの手紙には、苦々しいものがペン先から流れ出していて、むしろ、より若い者の人気に対する年長者の妬みが示されている。ヨーゼフ・モーアは極めて人気のある司祭であり、彼のミサも盛況で名声を博している。さらに、この者はオーベルンドルフとその周辺教区における教会音楽の刷新にも非常な貢献をするであろう。”

ネストラー司祭は、上級司祭がヨーゼフに与したのを知るや怒りを爆発させ、それは彼の忌み嫌う助手のヨーゼフ・モーアに向けられた。そして彼は何が何でもヨーゼフを厄介払いにしようとした。ネストラーは彼の仲間を通じ、ヨーゼフが私生児であり、死刑執行人のヴォールムートが彼の代父であるという噂をオーベルンドルフに広めた。これは明白に致命的な名誉毀損であって、その効果は損なわれることがなかった。人々はショックを受け、彼の友人であった多くの者もそれ以上彼について知りたがらなかった。フランツもまた、彼の音楽の友であり、他の多くの機会も共にしてきたヨーゼフに、その経歴ゆえに背を向けた。



ザルツァハ川のポート

12月中旬、ストレスと孤独化の影響でヨーゼフは再び肺病を患った。グルーバーがいかにヨーゼフの状況が悪いかを知ると、彼に勇気が湧いてきて、もうネストラーがヨーゼフにしていることを傍観し続けようとは思わなかった。

そしてオーベルンドルフに奇妙なことが起こった。1818年のクリスマスイブの前日、朝のミサの後、オルガンが音を出さなくなったのだ。ネストラー司祭はオルガン無しでクリスマスのミサはできないと知っていたので、激昂した。このようにグルーバーはこの壊れたオルガンで一つの状況を作り出すことに成功した。その他に方法のないような状況を。いまや、2人の友人はクリスマスの深夜のミサを、ヨーゼフがマリアプファルで経験したように、伝統的な楽器を用い、ドイツ語とラテン語で歌を歌って催す機会を得たのだった。ミサに続けてヨーゼフがギターを手に取ると、彼らは、ヨーゼフが単に”クリスマスの曲”と呼んだ——われわれが”きよしこの夜”として知る——歌を皆で歌った。彼は、どんな人でも、いつでも、どんな楽器でも、この歌を歌い、イエスの誕生を祝えるようにこの歌を書いた。これにはネストラー司祭の心すらも動かされ、二人の司祭はしばらくの間和解したのだった。

翌年の7月までには二人の不和に再び火がつき、ヨーゼフは教会会議に移動を申し入れた。1819年10月、彼はクヒルへ行くためにオーベルンドルフを去った。このアルプス山麓の小さな村は芸術的に装飾された教会と5世紀にこの地でなされた聖セヴェリンの奇跡によって有名である。すなわち、教区の成員の各々が一本のろうそくを受け取ったところ、その信仰と心の純粋な者のろうそくにのみ火がつき、その他の者のろうそくには火がつかなかったという逸話である。この地からは強い神秘的なエネルギーが湧き出ており、それはヨーゼフに新たな力を与えた。その後、ヨーゼフは数年にわたる旅を経験する。彼は9年の間に11の教区を転々とした。ゴリング、ヴィガウン、ハライン、クリスプル、アードネット、アンテリング、コップル、再度アンテリング、オイゲンドルフ、そしてホーフという具合に。



オルガン、オーベルンドルフ

最後に1837年、ヨーゼフはポンガウのヴァークラインへと転地となる。彼はこのことについて全く不満であって、「この泥棒と悪党の教区では司祭は人々の犬だ。」と漏らしたということが知られている。

ヨーゼフは、彼の有していた限られた手段を用いて貧しい子供が学校に通えるようにするための学校基金を創設する。ぼろぼろの校舎が修復された後、シュヴァルツェンベルクの大司教フリードリヒ・フルストが個人的にこの建物の落成式を行った。このことは村民たちから大変な榮譽としてとらえられ、彼らはモーア司祭に大満足だった。彼は村の酒場の客としても歓迎された。そこで彼はビールを一杯飲んだ。そして時折、二杯目を飲んだ後にギターを手に取り彼自身の曲を一、二曲演奏したのだった。ただ一つ彼にとって耐えがたいことは傲慢さだった。彼は人々に対する精神的介助以上に靴と服に気を使った一人の助手を解任した。



ヨーゼフ・モーアの墓

ヨーゼフ・モーアは1842年12月4日ヴァークラインで没した。彼は生まれた時と同じぐらい貧しい状態で世を去った。きちんとした埋葬すらできないほどお金がなかった。なぜなら彼は人々に、なかでも彼が与えなければ学校教育を受けられなかったような子供たちに、全てを与えていたからである。彼は私たちにもあるものを遺した。それはイエスキリストの誕生を、そして全ての子供たちの誕生を、誰もがわかるように易しく、また美しい方法で祝うクリスマスソングである。

これが私が知る限りの、発祥と初演の物語である。

私たちは、フランツ・クサヴァー・グルーバーが、1854年の彼の”信憑性のある記録”において伝えているように、1818年のクリスマスの祝祭の前日にオーベルンドルフのオルガンが壊れたために、ヨーゼフが一夜で歌を作った、その際、ヨーゼフが歌詞を、グルーバーがメロディーを作ったと141年にわたって信じてきた。

この話は今日、もはや信じられるものではなくなった。1995年に、唯一ヨーゼフ・モーア直筆の、1816年の日付入りの”きよしこの夜”の原本が発見されると、この世界的に有名なザルツブルクのクリスマスソングの歴史には、ザルツブルクのシュタインガッセに端を発する新解釈がなされ始めたのである。



礼拝堂、ヴァークライン

ハンノ・シルフは10年間、この詩の発祥とヨーゼフ・モーアの生涯について取り組んできた。彼はヨーゼフ・モーアが誕生した部屋を復元した、”きよしこの夜博物館/ザルツブルク”の創設者で、ヨーゼフ・モーア財団も設立した。また彼は”きよしこの夜”についての二冊のオリジナル書籍の著者である。

I. Die Entstehungsgeschichte des Liedes (歌の発祥の歴史)

II. Die Geschichte seiner Uraufführung (その初演にまつわる話)